【新刊紹介】

飯田睦治郎著：気象の未来像—理想の姿を求めて（NHKブックス）

昭和47年，222頁，400円，日本放送出版協会

数年前「気象の未来像」という言葉を聞けば，1カ月後の天気がピッタリ予報でき，一方では，天候が自由にコントロール出来るような，バラ色の未来の姿が浮んできた．しかし，現在はどうであろうか，副題なしのこの題名のみから内容を推測する人は，たぶん，人間活動による自然環境汚染の結果生ずるであろう，将来の気候変化のもたらす恐ろしさを警告する書と思うに違いない．もちろん，この本はそれについてかなりの頁数をさいているが，それ以上のものを目指している．地球の汚染，人口増加問題により，今後数十年以内に人類は衰亡への急階段をころげ落ちるのではないかと考える人々の数は急激に増えつつある．著者もその一人であるが，このような可能な危機をのりこえ，更に積極的に全人類の望む生活環境に適した理想的な自然を造りだすために，気象制御や気候改造の研究が今程切望される時はないと考える．自然破壊の問題が充満している現在，気候改造を考える事自体が，自然に対する冒瀆であるとの声もまた高い．そのような声が出るのは，その必要性のPRが現在まで不足しているためと痛感したのが，この本を書く動機であったと著者は述懐している．

内容は2部にわかれ，第一部は気象の人工制御，第二部は気候の改造の問題を取扱っている．第一部の気象の人工制御とは，人間やその生活をおびやかす気象現象を除去する事を主な目的とする．本書では，この部の大半を人工降雨の研究の歴史的発展の過程を紹介する事に費やしているが，台風・トルネード・落雷・降雹・降雪や霧の制御実験についても，かなり斬新な資料に基いてふれている．

第二部の気候の改造では，地球規模での2，3の改造計画を述べ，また各国で考えられている乾燥地帯の大規模な改造計画を紹介し，さらに人間活動による意図されざる気候の改変について，具体例を示しつつわかりやすく解説している．しかし，ここでは改造計画そのものを羅列的に詳しく述べる事には重点を置かず，なぜ気候の改造が必要であるかを納得のゆくまで示そうとする意図が伺われる．

この中で述べられているように．既に成功しているものもかなりあり，もう少しの努力で達成可能なものもあり，読者は，天候の調節や改造が，気象学者の単なるSF的な夢物語ではなくなっている事を実感として受け止めるであろうし，また気候改造を自然破壊そのものと認識する考えは誤りである事を知るであろう．ただ，第二部で，ソ連のカラクム砂漠開発とかアメリカのコロラド河流域開発など既に成功している例を一つ取り出し，それによる局地的気候変化や好まざる副次的作用はなかったかどうか示してあれば，より迫力を増したであろうと惜しまれる．また，本書に期待をもって紹介してある，日米協力による台風制御のプロジェクトは，種々の事情から，実施段階以前に中止のやむなきにいたった事を付け加えておく．

この本は一般の読者を対象としており，読みやすくするため科学的精確さを犠牲にしている処もあり，専門家が自分の関連する分野だけを抜き出してみれば不満な記述も当然あるが，全体として眺める時，気象の専門家も一読の価値ある問題提起の書といえよう．

最後に警告しておきたいのは，気象の制御や大規模な気候の改造が可能になるまでに，世界に真の平和が訪れていなければならぬ事である．これが逆になると，人類の幸福のために利用されるべきこれらの研究成果は，ただちに危険きわまりない強力な武器そのものになるからである．

（片山　昭）